



民泊活況 顔ぶれ多彩

リオデジャネイロ五輪のメイン会場がある市西部バーラ地区。湖畔の風が心地よいコンドミニアムの部屋は今、8月5日の開会式当日に到着する海外からの客人を待ちわびている。

クラシック調の家具に対面式キッチン、2つの寝室を備えた5階の一室の主は元公務員のアナルシア・リアニ・デ・ルナさん(66)。「試合だけじゃなくて、美しい町並みも見てほしいわ」。旅行に出かける五輪期間の17日間、恋人と暮らすこの自宅は観戦に訪れる米国人女性ら2人の宿になる。

開催地リオでは「民泊」で部屋を貸す市民が急増している。

屋上から五輪のメイン会場を一望できる自宅を貸し出す一家(23日、リオ市内)

写真 柏原敬樹

カウントダウン

Rio 2016

中

大会公式サプライヤーを務める米エアビーアンドビーの仲介サイトには3万5千物件が登録されている。同社の展開地域ではパリやニューヨークなどに次いで世界4位の規模という。

新興住宅地のバーラ地区、観光客に人気があるコパカバーナ・イパネマ地区のほか、ファベール(貧民街)のアパートまで、登録物件の顔ぶれは多彩だ。予約済み物件の平均料金は1泊当たり約170米ドル(約1万8千円)で、需要が高い市内のホテルに比べて割安となっている。

「生活の足しにしたいから」。ブラジル経済が低迷する中で民泊のホストからはこんな声も聞こえるが、大会中50万人ともいわれる観光客受け入れを後押ししそつだ。